

◆ 今週のコメント

- ・インフルエンザの定点当たり報告数は1.63で、過去5年平均値(2.09)を下回っていますが、第50週(1.22)に比べ増加しています。全国では7.18と、過去5年平均値(2.12)を大きく上回っています。
- ・レジオネラ症の報告が2例(第50週追加分を含む)あります。本年の累積報告数は19例で、全数報告感染症の対象となった平成11年4月以降の年報告数(0～8例)と比べ、最も多くなっています。推定感染経路は、水系感染6例、土壌感染1例、不明12例となっています。年齢階級別では、30歳代が1例、50歳以上が18例で、50歳以上が90%以上を占めています。

◆ 今週のトピックス:〈感染性胃腸炎〉

- ・今週の定点当たり報告数は16.02で、過去5年平均値(11.38)を大きく上回っており、本年で最も多くなっています。詳細は、トピックスに掲載しています。

○ お知らせ

・ 麻しん及び風しんの全数調査への移行について

「麻しん」(成人麻しんを含む。),「風しん」は、感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律施行規則の一部改正に伴い、平成20年1月1日より五類の全数報告感染症となりました。これにより、本市が独自に行っておりました「麻しんの発生件数の把握」は廃止し、他の全数報告感染症と同様の扱いとします。

・ 「医療従事者向け京都市感染症情報配信サービス」の開始について

京都市感染症週報等の感染症情報を、電子メール(携帯電話でのメールを除く)で医療従事者等に配信するサービスを平成20年1月9日(水)より開始致しました。なお、利用登録時には、事前にお配りしておりますユーザー名、パスワードが必要となります。ご活用ください。(問合せ先:京都市衛生公害研究所 TEL:075-312-4943)

◆ 発生状況

全数報告の感染症

- ・二類:結核 4例(喀痰塗抹陽性 1例)【4月以降の累積報告数 326例(喀痰塗抹陽性 94例)】
- ・四類:レジオネラ症(肺炎型) 2例(第50週追加分含む)
- ・五類:アメーバ赤痢(腸管アメーバ症) 1例
- ・五類:後天性免疫不全症候群 4例(無症候期3例, AIDS 1例)(第46・48・50週追加分含む)

定点報告の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ	インフルエンザ	1.63	111
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	16.02	657
	② 水痘	1.10	45
	③ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.78	32
	④ RSウイルス感染症	0.39	16
	⑤ 手足口病	0.37	15
眼科	流行性角結膜炎	0.30	3

病原体情報

(検体名は、紙面の都合上、咽頭ぬぐい液をNP,糞便をFC, 髄液をSF, 尿をURと略す。)

検出病原体(報告数)	臨床診断名(採取週)	検体名	検出病原体(報告数)	臨床診断名(採取週)	検体名
コクサッキーウイルスB5型(2)	かぜ症候群(第49週)	NP	RSウイルス(2)	かぜ症候群(第47, 49週)	NP
エコーウイルス30型(2)	かぜ症候群(第48週) 感染性胃腸炎(第49週)	NP,FC	アデノウイルス2型(1)	熱性けいれん(第49週)	FC
インフルエンザウイルスAH1型(1)	インフルエンザ(第50週)	NP			

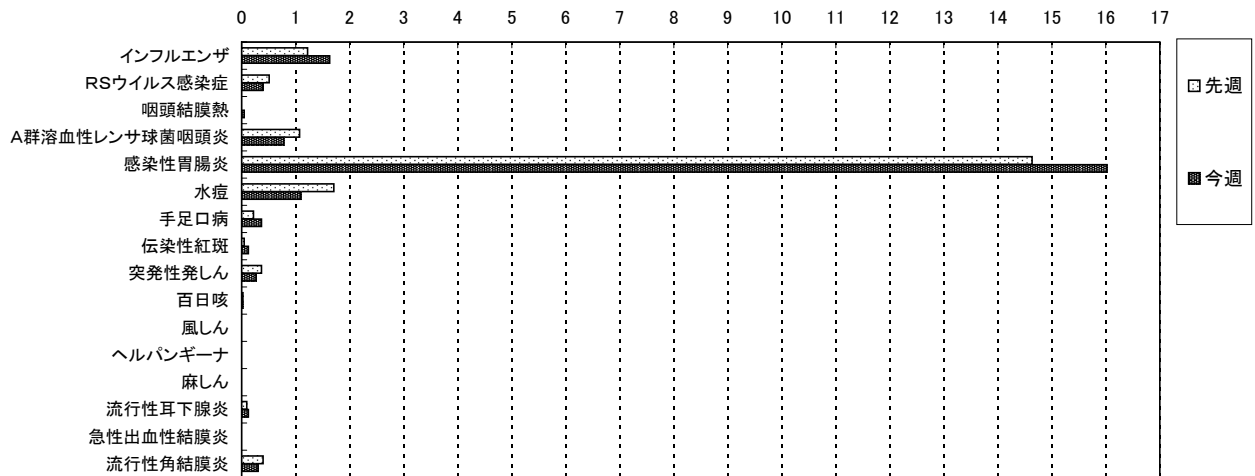
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス:〈感染性胃腸炎〉

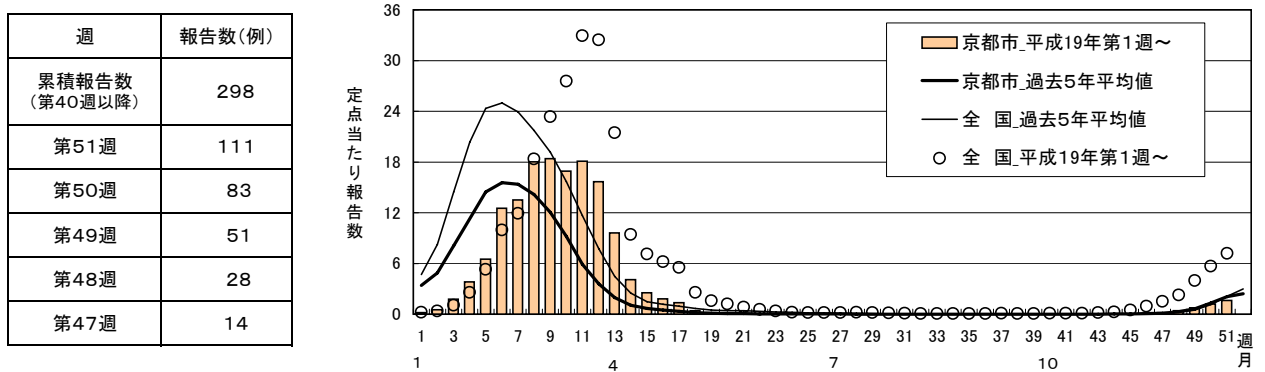
(注)京都市のデータは、平成20年1月7日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。また、本情報での患者数は、届出医療機関所在の保健所での集計で、患者の住所を示すものではありません。病原体情報は、病原体定点等から京都市衛生公害研究所へ搬入された検体から検出された病原体です。

◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第51週)と先週(第50週)の定点当たり報告数の比較

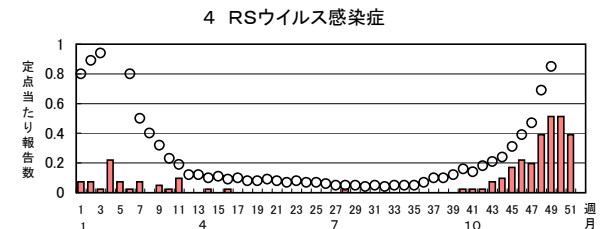
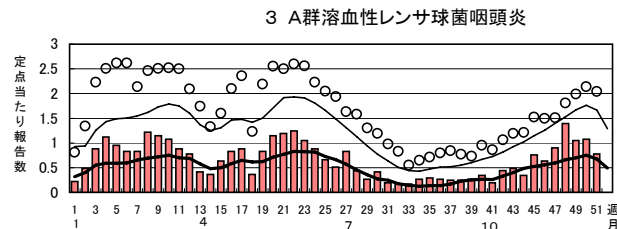
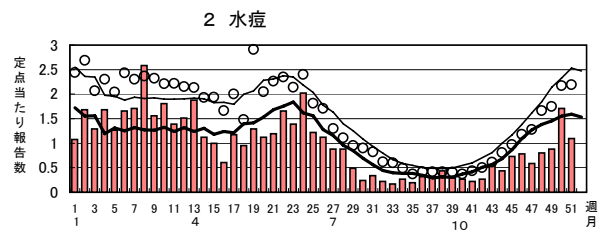
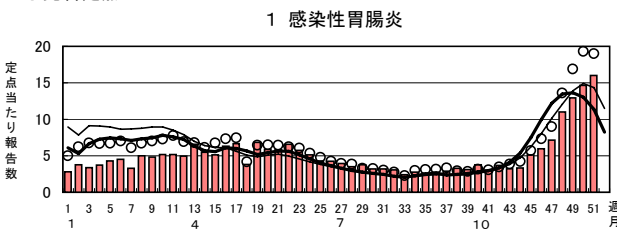


2 インフルエンザの定点当たり報告数の推移



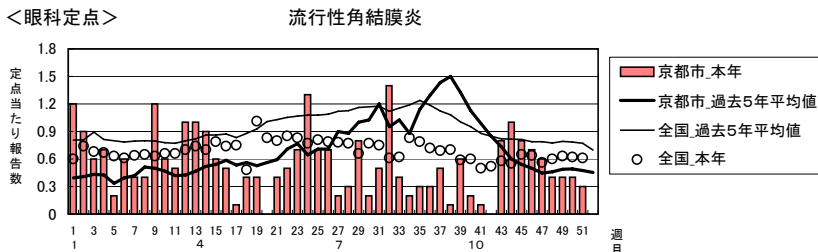
3 主な感染症(小児科)の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>



※ 平成15年からの追加疾患のため、過去5年平均値はありません。

<眼科定点>



今週(第51週)のトピックス: <感染性胃腸炎>

今週の定点当たり報告数は16.02で、過去5年平均値(11.38)を大きく上回っており、本年度で最も多くなっています。全国においても、先週(19.32)に比べやや減少したものの、18.99と、本年度で2番目に多くなっています。

行政区別に見ると、11行政区中7行政区で、各行政区別に算出した過去5年間の上位5%値を超えています。

年齢群別に見ると、本市、全国ともに9歳以下が約75%を占めており、9歳以下のうちでは、0~1歳がともに約20%と最も多くなっています。

報告が多い状態が続いていますので、今後も動向にご注意ください。

